

Women's Eyes Societies

(WESニュース 64号 平成28年9月発行)

第26回全国女性建築士連絡協議会 IN 奈良

◆概要

女性委員会委員長 浦 絵美

第26回全国女性建築士連絡協議会(全建女)は、「未来へつなぐ居住環境づくり“日本の暮らし豊かな生活文化の再発見”」をテーマに7月22日(金)、23日(土)に奈良にて開催され、全国より約350名の女性建築士が集まりました。ここ数年東京での開催ゆえ久しぶりの地方開催です。初日は、奈良女子大学にて、開会式、基調講演、パネルディスカッション、被災地の現況報告があり、夜は、会場をホテル日航奈良に移して交流会が行われました。

2日目は、奈良春日野国際フォーラム薨にて、分科会と全体会、その後は「大人の修学旅行」と題したエキスカージョンがありました。

全国女性委員長会議は、開会式前の午前中に、奈良女子大学の校内にある佐保会館(登録有形文化財)で実施。歴史ある和風建築物に、夜行バス、前日入り、始発利用の全都道府県の委員長が集まったの会議は、皆、どこかテンションが上がり、気分はまさに修学旅行です。

神奈川県からの参加者は12名(うち6名は前日入り)と、奈良での開催にも関わらず、多くの参加となったのは、A分科会にて神奈川県での防災への取組みを発表することも一因です。A分科会での発表の話が舞い込んできたのは、防災委員会とのコラボセミナー開催日(3月)でした。「継続した活動だからこそその報告をして欲しい」とのこと、女性委員会では、東日本大震災以降、女性目線で何かできないかと、防災・減災への意識を高める活動を行っていますが、この取組みには、防災委員会を外すことはできません。そこで、コラボセミナー開催直前に、東防災委員長へお願いし、2人で報告することに決めました。

良い案が浮かばない中、通常業務に追われ、気が付くと6月も半ばでしたが、ここからは、チーム

す。東さんとの打合せに始まり、両委員会内でのプレゼン、本番直前のプレゼンと、この準備も楽しい思い出です。



女性委員会のモットー「つどう・つくる・つながる・ひろがる、そして、支え合う」に沿って、神奈川の地形、神奈川県建築士会、防災委員会の紹介も行いつつ、2012年からの防災委員会とのコラボセミナーを報告致しました。

A分科会後は、参加者内に、防災への取組みには、「つどう・つながる・ひろがる」こと、そして「支え合う」ことが一番大事との認識が広がり、全大会の分科会報告では、この「支え合う」ことを3人で、中央に立つ女性(熊本県建築士会)を両側二人(福島県建築士会と神奈川県建築士会)で支えるという表現もしました。今まさに被災されている熊本を、被災経験者でもある福島とこのメッセージの発信元である神奈川で支えるという裏の意味を込めています。

観光どころではない全建女でしたが、発表者という経験が出来た事に感謝しております。



※全体会 能舞台でのA分科会発表

◆基調講演

安藤めぐみ

第26回目となる平成28年度全建女は、梅雨明けしたばかりの快晴の奈良にて、幕が開きました。1日目となる22日は、大きく分けて「開会式」「基調講演」「パネルディスカッション」という3部構成となっており、今回は特に「和室の在り方」について、考察する機会となりました。事前に、全国の女性員会へ「和室に関するアンケート」依頼があり、その報告もありました。

「基調講演」は講師の岐阜大学名誉教授渡辺光雄先生より、「住宅」における今昔の流れ、また未来の暮らし方についてのお話がありました。誰もがその身を置く「住宅」という建築にとっては、培った技術に新しい手法を加え、その上で季節感を豊かに享受できる「住空間」の再構築が重要であるという先生のお話でした。

「パネルディスカッション」につきましては、「住宅」の中でも更に「和室」に焦点を当て、年齢も性別も異なるパネリストのそれぞれ思う「和室の在り方」についての意見交換を拝聴いたしました。中でも印象的であったのは、「和室」とは背筋がピンと伸びる空間であると考え一方、家の中でもゆっくりと寛ぐ空間であるという真逆の発想が存在し、収容人数を問わないばかりか、そのポテンシャルをも問わない空間であったという事を私自身再認識させられた部分です。

私は初めての参加でしたが、とても興味深い有意義な体験となりました。



奈良女子大学記念館
(旧本館)重要文化財
※会場：
奈良女子大学講堂



◆A分科会での発表

防災委員会委員長 東 二郎

A分科会神奈川県活動報告の中で、防災委員会の歴史と活動報告及び防災関連ゲームの説明を行いました。意見交換にてHUGについては神奈川の他に、鳥取県、北海道旭川支部でも、HUGを通じて防災意識を高める活動の報告がありました。北海道では、読み上げるカードの仕様を北海道仕様工夫して行っているとの事でした。宮城県では、仙台市の有志がチーム仙台をつくり、1000名参加のクロスロードゲームを行った報告がありました。高知県では、防災研究会でDIGを体験したが、活動としては今のところは低調であるとの事でした。

応急危険度判定について、防災委員会の活動報告の中で、神奈川県が被災県になった場合の課題項目で、他県からの応援を受け入れる時のコーディネーターの人材養成が急務であることについて、今回被災した熊本県の状況をお伺いしました。当初熊本では応急危険度判定を1週間から10日で終わらせる予定でしたが、1カ月たっても終わっていない町(益城町)がありました。そのため今後活動方法を考える必要があると言われていました。また、女性建築士の方には、雑魚寝をしたりする関係で判定作業を遠慮して頂いたとの事でした。また、東日本大震災時、宮城県では応急危険度判定を他県に要請しない方針が出されたそうです。「水・食料・寝る場所を確保できない」との理由で断ったと震災後1年半たって応急危険度判定士が集まった席で県の職員の方から聞かされたそうですが、神奈川も今から被災県になった場合を想定して、平時からできる検討を一つひとつ重ねる必要を感じました。神奈川からは、神奈川県主催の仮設住宅の建設に関するワークショップに出席し、防災委員会の活動の報告を行ったこととホームページを読んでもくださいとアピールして分科会を終えました。各県の方と有意義な議論が出来たA分科会でありました。



※奈良市総合観光案内所(旧 JR 奈良駅の駅舎)

◆H分科会へ参加して

清水 麻紀

H分科会テーマは「2地域居住の提案」
「週末は信州暮らし」を合言葉に信州の気候風土で都会と違った多様な生き方を探したい人のために「住まい・しごと・子育て」について都会の人が気軽に問い合わせ情報収集が出来る協議会が長野県主導で14団体が集まり発足しました。その発表と意見交換の内容を紹介いたします。

長野県建築士会は協議会の一員として2地域居住向けコンパクト住宅の冊子の作成。結果として現在自治体や個人からコンパクト住宅についての引き合いがあり、冊子の提案プランから竣工する事例もあるということと、長野県の魅力や子育てということで「山の保育園」が紹介されました。

意見交換では協議会を発足した理由としての過疎化対策が切実であったことと、大都市に近隣でありながら過疎の県において参考になるといったこと、冊子発行までのいきさつなどが取り上げられました。なぜリノベーションではなく、コンパクト住宅なのか、大きな住宅は改修ですら費用が掛かり過ぎる。2地域に居住するときの地元の方とのコミュニケーションについて、住んでしまえば問題が無かったという経験者の談話。そして子育てについて、幼少期は望ましい環境ではあるが、進学の時点で上京もしくは帰京せざるを得ない現実があるなど、これらの課題も見えてきました。



※会場：会議室
高い天井に
段階照明

H分科会の
様子

奈良春日野国際フォーラム薨〜・RA・KA〜は鹿で有名な奈良公園内にあり、目を楽しませる緑美しい庭園を備え、伸びやかな日本瓦葺きの寄棟の天平を思わせる美しい建物です。会議室もシンプルながらも趣向を凝らした内装がされ、能楽ホールも格調高く、奈良県建築士女性委員会の提案する魅力的な数々のエキスカッションと共に奈良県の開催のメリットを感じました。

◆交流会・全体会

雨森 隆子

交流会は、ホテル日航奈良にて（22日PM6：30～8：00）、約300名の参加があり、盛大に行なわれました。奈良の郷土料理や目も舌も楽しませてくれるバイキングの料理、余興など、女性の配慮が感じられ、華やかに加え、熱気溢れる会場となりました。また、「平城遷都1300年祭」のマスコットキャラクター・せんとくんが登場、会場が湧き上がり、全国の女性建築士の交流の場を盛り上げてくれました。



2日目、各分科会報告が行なわれ、能舞台にて全体総評がありました。永井連合会委員長より、平成28年度第26回全国女性建築士連絡協議会の成果として、4項目のアピールが発表されました。最後に開催中に集められた義援金が、熊本県建築士会の女性委員長へ、手渡しされました。



来年度開催場所：建築会館（東京都）
2017年
7月15日（土）、16日（日）（予定）
皆様 是非ご参加下さい！！

◆エキスカーション

「大人の修学旅行」へ参加して

有泉ひとみ

2日目の大会終了後に行われるエキスカーションは、10コースあり、その中で私は、『バスで巡る美術館への旅』を選びました。由緒あるホテルで昼食を頂いた後、大和文華館(近鉄所有の美術館)(吉田五十八設計)、松柏美術館・旧佐伯邸(村野藤吾設計)を見学しました。



大和文華館は、外壁のなまこ壁の漆喰部分と壁面の美しい色合い、ホールの壁の木の格子を加工した職人泣かせの納まり。タイルの使い方が絶妙で上手く外部を取り入れている明るい松柏美術館。建設時の昭和40年から、何一つ手を加えていない旧佐伯邸の恐ろしいまでの憎い納まりとデザインだけではなく、現代でも十分通用する設備の基本的な考え方には感服しました。また、案内コースではなかったのですが、大和文華館敷地内にあります建物に目がとまりました。この建物は、奈良ホテル本館の旧ラウシジを大和文華館開館25周年の記念事業として移築されたものでした。奈良ホテルに前泊し、奈良ホテルと国鉄・近鉄の関係や敗戦時の奈良ホテルの守り抜いた物等を聞き、

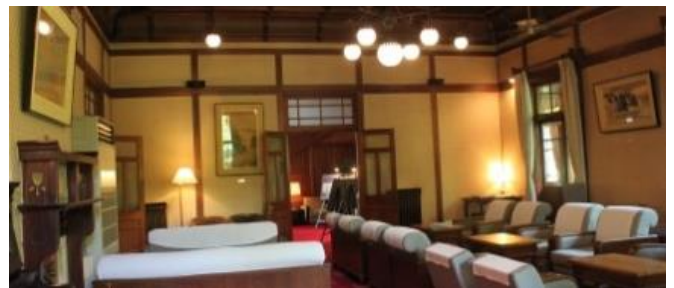


また実感してきた私達でしたので、それが奈良ホテルのものであったとお聞きする前に、解った事が何故か、一番嬉しかったです。この建築に逢えた事で、コースを選んだ運命を感じました。

◆奈良ホテル滞在記

茶谷 亜矢

大会参加を機に有志と1909年創業の奈良ホテルの西の迎賓館に初滞在しました。月夜に荒池の向こう側から見る遠景に1世紀前の面影を感じながらアプローチ。100年後の樹木の管理の難しさも覚えつつ徒歩到着は少ないかもと呟きながら長い坂道を上っていくと、本瓦屋根に鴟尾(しび)を見つけ早くも感動。腰下見板張りに漆喰、舟肘木にニヤリ、奈良に来たと実感しました。飾りを抑えた車寄せ、欄干の廻った吹抜け折上格天井の玄関、メインダイニングは城のような天井長押・釘隠し、欄間・天袋のパーツが不思議なところに配置され。戦中戦後の背景を鑑みても驚きの和洋折衷、なお残る鳥居暖炉、個室は床脇暖炉。重厚華麗と謳う内装や照明に目を奪われながらも、フレンチに舌鼓を打ち、ぐったりとなったラウンジ



のソファの座り心地から数種類の差異を発見しマニアックな心を揺さぶられたのか、夜は建築談義となりました。早朝散歩と茶がゆの朝食後、ホテル内ツアーに参加。名画や様々な逸話も印象的でしたが個人的には3年前の新発見の話が格別でした。本ホテルと長崎ホテル、設計者の辰野金吾とその師コンドル、受け継いだもの。現代に繋がるクラシックホテル同士の縁。国賓滞在の為に造られまた受け継がれ守ってきたホテルマンの意気にも心打たれました。午前では廻れなかった旧大乗院庭園は次回へと諦め大会へ参加となり、その後のエキスカーションの大和文華館で予期せぬ再会がありました。よく似ているなあとしげしげ眺めていたら銘板が。もと奈良ホテルのラウンジだったのを移築したものとか。ホテルにはないステンドグラスが欄間に両妻面が対になっているデザイン、室内が見られなくて残念でしたが束の間の滞在で二度めぐり合った縁でした。古代に留まらず歴史の繋がり人との繋がりも感じた奈良でした。